

トーマス・フリードマン著「バイルートからエルサレムへー NY タイムズ記者の中東報告ー」朝日新聞社 1993年7月10日刊を読む

## レバノン内戦

1. (1) ① そのおおもとは、レバノン建国自体にまで遡ることができる
  - ② レバノン共和国は第1次大戦後誕生
  - ③ 国内の2大宗教の「スンニ派イスラム教徒」「ロマン派キリスト教徒」が手を結び成り立つ
  - (2) <マロン派東方キリスト教徒>
  - ① 15Cにマロンという修道士により、シリアで創設
  - ② <その主張>
  - ・ローマ法王とローマカトリック教会の主権は認める
  - ・しかし、彼ら独自の礼拝式は維持する
  - ③ マロン派は1700年代後半までにレバノン山脈で最強の宗教コミュニティになった
  - (3) <ドルーズ派>
  - ① イスラム教の分派
  - ② 厳格な宗教的信念の下、信仰を一人守るためレバノン山脈の山頂一帯にひきよせられた
2. (1) 第2次世界大戦後
  - ① オスマン帝国のうち現在のシリアとレバノンを占める地域がフランスの手に落ちる
  - ② 1920年、ロマン派指導者はフランスと同盟関係を結ぶ→新レバノン国を創設、「大レバノン」とする
  - ③ 「スンニ派」と「シーア派」はこの「大レバノン」に囲い込まれるが、(前もっての相談なしのため憤慨)
  - (2) <世界のイスラム教徒は「スンニ派」と「シーア派」に分裂>
  - ① 7C、イスラム教創始者である預言者ムハンマドの死後、だれが後継者となるか(イスラムの精神的・政治的指導者であるカリフ)
  - ② 「スンニ派」(多数派)
  - ・後継者は砂漠のしきたりに従って共同体の長老による選挙と同意によって任命されるべきだ
  - ・「スンニ」の語源は、アラビア語で「伝統」を意味
  - (3) <「シーア派」(少数派)>
  - ① ムハンマドの後継者は、もっぱら彼の家族や親族から出るべきだ
  - ② だから、ムハンマドに最も近い従兄弟で、義理の息子でもある「アリ」が共同体の指導者に任命されるべきである
  - ③ この人たちをアラビア語で「党派」を意味する「シーア」と呼ぶ

④この「シーア派」の教徒は、イスラム教が伝播する以前、ペルシャ(イラン)で勢力をもっていた王権神授説の考え方に影響を受けている

3. (1)①やがて、スンニ派は「アリ」の支持者を打倒し、独自に選んだ「カリフ」を打ち立てた  
②だが、その後もスンニ・シーアの分裂はイスラム時代を通じて続き、神学的、そして、文化的違いまでもが顕在化し、シーア派をスンニ派から引き離してしまった  
(2)イスラム教「スンニ派」は「力と成就の教義」。「シーア派の教義」は「抵抗」。「シーア派」の原点は「敗北」、つまり「アリとその一族の敗北」  
(3)このため、主たる訴えは、「敗北し、抑圧している人々」に向けられる。「イスラム教世界での敗残者、特に貧しく疎外された人々のための反撃の叫び」である、のはそのため。

#### 4. (1)1930年～1940年代

レバノンでマロン派に次ぐ大きな宗派である「スンニ派」は…

・イスラム教徒の中でも裕福で、最も都市化され、最も高い教育を受けるという傾向を示し始める

(2)人口で第3位を占める「シーア派」は…

・どちらかといえば田舎に住み、経済的にも富んでいたわけでもなく、教育もさして十分というわけでもなかった

(3)1943年、スンニ派、シーア派の指導者は、キリスト教徒の政治的合意に達し、フランスから独立、レバノン共和国を打ち立てた

#### 5. (1)①イスラム教徒は、シリアとの統一要求を捨てる

②キリスト教徒は、フランスとの関係を断つ

③レバノンは「アラブ国家」であるとの合意→国民合意

(2)国民協約：不文律の合意

①「レバノン大統領」は、マロン派から選出、「議会」は、キリスト教徒とイスラム教徒が「6:5」の割合になるよう定めた→キリスト教徒の優位を保証するため

②「首相」は必ず「スンニ派」、「議長」は必ず「シーア派」から選出→国家のアラブ・イスラム性を保証するため

③この協約はマロン派と他のキリスト教徒が人口の約50%を占めている限り維持された

(3)①しかし、1970年代になると、イスラム教徒が急激に人口を増す。レバノン社会に逆転現象

○キリスト教徒は総人口の3分の1まで縮小

○「イスラム教徒」と「ドルーズ派」の合計は3分の2を占める

○中でも「シーア派」が国内最大の集団に

②→イスラム教徒側は、「首相の権限強化」などイスラムがこれまで以上に政権参加できるよう政治改革を始めるべきだと要求

③現状を維持するため「マロン派」は民兵組織を創設。

ファラジスト民兵(ピエール・ジェマイエルが創設、息子の「バシール」が引き継ぐ)

## ユダヤ人とパレスチナ人の争い

1. 19C 後半から 20C 初頭にかけて、世界中に散らばっているユダヤ人たちが、シオニズムとよばれる「近代ユダヤ民族主義」に駆られて、パレスチナの地へと群れを成して帰国を開始することが始まった。その地が、自分たちの「ホームランド(民族的郷土)」であると聖書に記されているというのである
2. シオニストたちは、「世界中のユダヤ人がパレスチナの地に集合し、近代的な国民国家を建設し、世界の他の国の人々と伍する位置を得よう」と呼びかけた
3. 初期のシオニストのほとんどは、すでにパレスチナに住んでいたアラブ人の存在を無視するか、買収できると考えたり、あるいは度々にユダヤ人の支配に屈服してゆくだらうと考えていた
4. 第 1 次世界大戦後、パレスチナは英国の支配下に入り、一方レバノン、フランスの支配を受けるようになった
5. 1921 年、英国はパレスチナとよばれる拡大な地域を 2 つの政治体制に分割した。一つは、ヨルダン川東域に建設した「トランスヨルダン王国」で、これは後に「ヨルダン」となる
6. 英国はその地の支配者として、イスタンブールで教育を受けた。ベドウィンの首長、アブドラ・イブン・フセインを擁立した。その一族は、もともとサウジアラビアの出身である。  
当時のヨルダンの人口は約 30 万人で、そのうち半分は遊牧民であるベドウィン、残りの半分は「東岸民族」、すなわち、ヨルダン川東岸地域に住む「パレスチナ・アラブ人」であった
7. 〈パレスチナの西半分〉
  - ・パレスチナ・アラブ人、シオニストのユダヤ人が英国の傘の下で支配権を争う
  - ・英国は、パレスチナ西半分から撤退、支配権争いから手を引く  
→紛争地区の運命を決定する権利を国連に委ねた  
↓
  - ・1947 年 11 月 7 日国連総会は西パレスチナ分割を 33 : 13 棄権 10 で決議
8. 〈決議内容〉
  - (1) ネゲブ砂漠・テルアビブ・ハイファ間の沿岸平野部、北部ガラリアの一部→以上をユダヤ人に与える→[ユダヤ人は受け入れ]→ 1948 年 5 月 14 日シオニストは独立を宣言→翌日パレスチナ人は宣戦布告→第 1 次中東戦争、パレスチナ戦争、イスラエル独立戦争
  - (2) ヨルダン川西岸・ガザ地区・ヤッフア・ガリラヤのアラブ人地区→以上をパレスチナ・アラブ人に分ける→[パレスチナ、アラブ、周辺アラブ諸国はこの分割案を拒否]
  - (3) エルサレム(イスラム教徒からもユダヤ教徒からも聖なる都市として崇められている)→国連信託統治の国際領
    - ・ベングリオン<イスラエル建国の父>

9. この戦争の過程で

〈シオニスト〉国連で割り当てられた全地域、パレスチナ国土として指定された土地の一部を占領  
〈ヨルダン〉国連でパレスチナに指定された残りの土地のうち西側を併合  
〈エジプト〉ガザ地区の支配権を掌握

\*アラブ諸国のうち、パレスチナ人がこの地域に独立政府を認めようという国は一つもなかった

10. 〈ヨルダンの西側併合〉

戦争前：ベドウィン・東岸パレスチナ人→ 45 万人

戦争後：西岸パレスチナ人→ 40 万人

イスラエルとなった地域から逃げたり、難民となった→ 30 万人

計 115 万人

11. 1948 年第 1 次中東戦争後

(1)イスラエルはエジプト、レバノン、ヨルダン、シリアと各々個々に休戦協定を締結

(2)しかし、これらの合意にもかかわらず、パレスチナ抵抗勢力(運動グループ)は、自国領土からイスラエルに攻撃(エジプト占領下のガザ地区からの攻撃が目立つ)

アラブ諸国は黙認

(3)1964 年

- ・アラブ連盟はパレスチナ抵抗運動を 1 つの傘の下にまとめる(エジプトのガマール・アブドゥル＝ナーセル大統領が主導)
- ・PLO(パレスチナ解放機構)→アラブ体制がパレスチナ人を支援、パレスチナ人を支配するため

12. (1)1967 年 6 月、イスラエルはエジプト、シリア、ヨルダンに対して先制攻撃

(2)〈理由〉

ナーセルがユダヤ人国家全滅計画を宣言。そのため、エジプトはシリア・ヨルダンと軍事同盟を結ぶ。イスラエルとの国境沿いに軍隊を結集。イスラエルのエイラート港への海上輸送を封鎖したため

(3)〈6 日間戦争〉〈第 3 次中東戦争〉

イスラエルの奇襲、イスラエル軍が(エジプトのシナイ半島、シリアのゴラン高原、ヨルダン川西岸)を占領し、**終結**→**アラブの大敗北**

13. 1969 年、「革命の気分」がアラブ世界一帯を覆う

(1)急進的パレスチナゲリラ組織が PLO を自らの手に奪い取る

↓

「フェダイン(アラビア語で戦士の意)」グループ

〈PLO 議長〉「ヤセル・アラファト」

ファタハ(アラビア語で勝利の意)というゲリラグループのリーダーで無名のパレスチナゲリラ

(2) PLOゲリラグループ

イスラエルとの戦いを続けるため、アラブ諸国から莫大な資金援助を受ける。レバノンとヨルダンの難民キャンプの支配権をもつ。

ここからイスラエル国内や海外のイスラエルの標的に攻撃

(3) PLO は、ヨルダン、レバノン南部のイスラエルと接している地域で支配権。

PLO のイスラエル攻撃はイスラエルからの報復をもたらす→パレスチナ人とレバノン人、パレスチナ人とヨルダン人との間の緊張を生み出す

14. (1) 1970年9月

急進派パレスチナゲリラが3機の飛行機をハイジャック、ヨルダンに乗り入れた

(2) <ゲリラ側>は、ヨルダン軍が機体に接近することを許さず、乗客を救出することを妨害

(3) <ヨルダンのフセイン国王>

全国土に対する支配権を失う瀬戸際にあるとの危機感。アラファトとその部下をヨルダンから永遠に追放しようとして決意。ヨルダンの首都アンマンに置かれた PLO 主導の難民キャンプ、およびその周辺一帯に全面的攻撃。

(4) <PLOゲリラ側>

フセイン国王の打倒。フセイン国王の手からヨルダンをもぎ取ることを公言。対抗

(5) <結果>

フセイン国王が勝利。アラファトは女装してアンマンから逃げ出す

15. <アラファトと PLO>

(1) ベイルート、南部レバノンにあるパレスチナ難民居住地域に創っていた「国家内国家」に退却

(2) アラファトとその部下は、イスラム教徒だったので、レバノンのイスラム教徒やドールズ派から歓迎された

(3) レバノンでは、イスラム教徒とキリスト教徒との確執は深刻

<レバノンでは、PLO は事実上、イスラム教徒最大の民兵組織>レバノン政府軍を構成するキリスト教徒部隊

↓

レバノンは内戦状態(1975年4月13日)

16. (1) 南部レバノン、ベイルート市の西半分 レバノン山脈の北部・東部、ベイルート市の東半分

↓

PLO イスラム教組織

↓

ファシストキリスト教組織

(2) レバノンの残りの地域：トリポリ(北部港湾地域)、ベカー高原→シリアが内戦を形だけでも締結させようと軍隊を派遣、シリアの支配下、シリア軍は残留

(3) 1976～1979年→ベイルートは分裂状態で呻吟

## <コメント>

パレスチナ自治区ガザを実効支配するハマスとイスラエル軍の戦闘が激しさを増し、双方の死者数は「10月8日」には970名に達した。イスラエルのネタニヤフ首相は、7日夜、「ハマスを無力化する」と宣言。イスラエル軍による地上侵略の可能性が取り沙汰されている(日本経済新聞 10月8日電子版)。このような報道に接するとき、ものごとの本質とは何かを考えないわけにはいきません。トーマス・フリードマン氏の「バイルートからエルサレムへ」はそのための基本テキストです。是非、御一読ください。

2023年10月8日(日) 林明夫